

# 子どもも大人も「安心」ある 保幼小の接続を目指して

長崎大学教育学部 准教授 脇 信明



小学校進学が近づくと、子ども以上に大人がソワソワしてしまうことがあります。「学校でちゃんとできるだろうか」と心配する気持ちは、どの家庭にも、そして保育者にも自然に生まれるものではないでしょうか。しかし、この不安が強くなりすぎると、子どもにも「学校は少し不安な場所かもしれない」と伝わってしまいます。



## 1 まずは大人の不安を和らげる

では、子どもたちが安心して進学できるために、私たち大人にはどんな役割があるのでしょうか。ここでは「安心」ある保幼小の接

子どもの進学にあたって、とりわけ保護者の皆さんは、学習面、友人関係、生活リズム、放課後の過ごし方など、さまざまな心配を

抱えていることと思います。不安が絶えず注がれていると、子どもの緊張が強くなることが研究でも明らかになっています。大人の不安が子どもに伝染するのです。さらには「できないと困る」と大人が構えるほど、子どもは「できない私はダメ（な子）なんだ」と自己否定感を抱きやすくなるのです。



## プロフィール

大分県出身。大分県や福岡県など、これまで保育者養成校に30年以上勤務してきました。現在、単身赴任で長崎へ。2人の子育てと共に、保育現場に育てられた父親研究者。

専門：保育学（保育方法論）  
主には、子ども同士の豊かな育ちと関係づくり、子どもの協同性の育ちについて現場とともに実践的な研究を行っています。

だからこそ、子どもを見守る側としては「できる・できない（正しい・間違い）」を求めるばかりではいけません。「できなければ許されない」という過度なプレッシャーはストレスになり、逃避行動や強い反発といった姿となって現れることも。「間違っても大丈夫よ」「挑戦する姿を応援するよ」という、おらかな関わりや、急がせない温かい眼差しが大切になってきます。誰だって失敗しながら成長していくものです。大人のやり方を押し付けず、子どもと対話しながら伴走していく姿勢が大切です。「きっとできるーあな

落ち着いていることは、子どもの挑戦を支える大きな土台となるはずです。



## 2 年長期の子どもの育ちを見つめ直す

前述のように、進学間近になると「ちゃんとできるように頑張ってほしい」という思いから、必要以上に「小学校に適応する姿」を求めてしまいがちです。しかし、小学校進学に本当に必要なのは、ひらがなが書けることや静かに座れることよりも、むしろ心の葛藤を乗り越える粘り強さや、自分の気

持ちを調整する力、そして何より仲間と対話し協力する力が重要なのです。このような力が育っていると、授業での困難や友達とのすれ違いに直面したときにも、前向きに乗り越えようとする姿勢が生まれます。

今、小学校では「遊びながら学ぶ」ことや「対話から学びあう」という授業が実施されています。これは、保育で大切にしてきたものと方向性は同じではないでしょうか。年長の1年間は、仲間とともに過ごす中で、自信や誇り、力を合わせて物事に向かう経験を積む大切な時期です。遊びや活動のトラブルや葛藤を乗り越える体験が、そして園生活を通して得られた充実感と満足感が、子どもたち

を支える力となるのです。二度と戻らない幼児期を大切に保育こそ、子どもたちにとって「最良の接続」になるのではないのでしょうか。

卒園を前に、そっと問いかけてみませんか。「この1年間、子どもたちは何を感じ、どんな力を育んできたのだろうか」と。その答えの中に、子どもの中にある大きな安心と充実、そして未来を切り開く、主体性の育ちが見えていてほしいと強く願うばかりです。

